

『三四郎』 森の女

Junko Higasa 2014.4.26

絵画「森の女」のモデルは里見美禰子である。そしてそれは、広田先生が恋した女の転換でもある。

三四郎が本を返しに訪ねた折、眠っていた先生は「生涯にたった一遍逢った女に夢の中で再会した」と云った。その女は、憲法発布の明治 22 年に国粹主義者に襲われた欧化主義者：森有礼文部大臣の葬列の中にいた。『十二三の奇麗な女だ。顔に黒子がある』

広田先生の夢の中の女は昔のままだ。『この顔の年、この^{なり}服装の月、この髪の日が一番好きだから、こうしていると云う。それは何時の事かと聞くと、二十年前、あなたに御目にかかった時だという』画の中の美禰子も三四郎に出会った時のままだった。広田先生の旧日本色の 23 年の夢が、三四郎の欧化日本色の 23 年の画に変わる。そして『あなたは余り程度胸のない方ですね』という言葉がこだまのように甦る。

漱石は、嫂：登世への敬愛の念を広田先生に反映させ、失われた女性の美德を懐かしむと同時に、日本の憲法下で「気が利きすぎた」画にしかないイプセン型の女の批判をしたが、女を嫌うことが出来ない男のサガとして、美しい思い出に仕上げた。

人は夢で予期せぬ人に逢うことがある。記憶の中の女は当時の若さのままで、追想している自分だけが年を取っていく。薄れゆく女は薄れゆく時代でもある。女は画、男は詩。ロセッティとベアトリーチェの愛の形を思い出させる『森の女と云う題が悪い』